



図書館だより

NOVEMBER

読書の秋

秋といえば、スポーツの秋、食欲の秋といろいろ続きますが、世間では読書週間(10/27~11/9)の季節……。図書委員会からはやはり『読書の秋』を1番に推します。そこで!今号から数回にわたって、本校の全教職員の先生方からお薦めの1冊を紹介して頂き、誌面で発表させて頂こうとこの読書週間特別号を企画しました。第1回目は、校長先生をはじめ、学年外に所属されている先生方からです。私達にはちょっと難しい本から読みやすい本まで、盛りだくさん!!…では、読書週間第1号をどうぞご堪能ください。



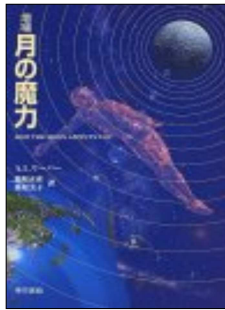
中原 昭
『詞集たいまつ I~VI』 むのたけじ著 評論社

『詞集たいまつ I』は、初版が1967年(著者は52歳)、以来91才までにVIが発行されています。内容は、人生の問題、社会の問題について著者の想いを込め高校生や大学生などを主な対象にラブレターを読むようなもの。詞集は、2、3行のものから長くても30行程度の詞文です。今の私の心を捉えていますのは、真冬木……(2730)。皆さんも詞集を手に入れば、ぴったりする詞文と出会えるのではないかと思いますので一読を試してみてください。



矢野 正彦
『増補月の魔力』

アーノルド・L・リーバー著 東京書籍



オカルトではありません。月が人に与える影響を精神科医が科学的根拠により解明していく本です。人が「宇宙と一体化した生物」であると思わせてくれる驚きの内容です。いつの時代も新しい科学の理論は、偏見を打ち破り独創性の中から生まれるものであると感動した一冊です。月に関する迷信と一蹴しないで下さい。

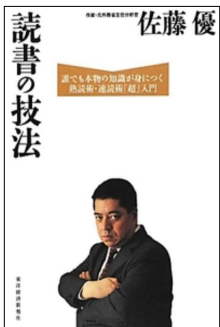
齋藤 繁樹

『歴史のなかの大地動乱』 保立道久著 岩波書店

時間軸を9世紀の日本に置き、自然災害と政治の関係を問い直した意欲作である。今回の震災では「想定外」で責任逃れを図る某会社の姿勢が国民の輿論を買った。一方当時の為政者には自然災害を天が下した罰であり、「責め深く予にあり」と述べる覚悟があったと指摘している点が印象に残る。励ましを与えてくれる書である。



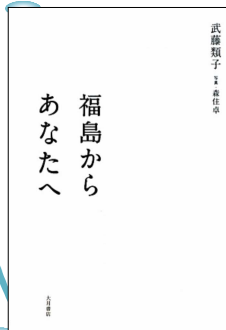
高槌 倫明
『読書の技法』 佐藤優著 東洋経済新報社



小さい時から本を読むことをしてきた。でも、本の読み方を教えてもらった記憶がないというか、だれも本の読み方を気にしたことがないと思う。あらためて本の読み方を考えさせてくれる本だ。何事も基本というのはあるので、ぜひ本の読み方を習得してたくさんの本を読んで欲しい。

鈴木 巳代治

『福島からあなたへ』 武藤類子著 大月書店



去年は3・11の東日本大震災で人生観が変わるような天災、人災があった。関連する書籍も多く推薦に迷った。脱原発集会での「福島からあなたへ」のスピーチは6万人に感動を与えインターネットでも発信された。感動したシカゴ大学の教授が米国でもスピーチしてと、作者の自宅がある福島の山里を突然訪ねたとされています。

上村 博
『身近な鳥のふしぎ』

細川博昭著 ソフトバンククリエイティブ



豊かな大自然のブナ林の中にスズメは居ません。人間の生活圏の中で生きているからです。鳥たちは恐竜の子孫であるとも言われています。美しい姿と声の小さなキビタキがコバルトブルーの南の海を渡って来ます。小さなジョウビタキがオホーツクの荒海を渡ります。よく観察して見ると、色々な鳥たちのいる事がわかりますよ。

豊田 竜宏

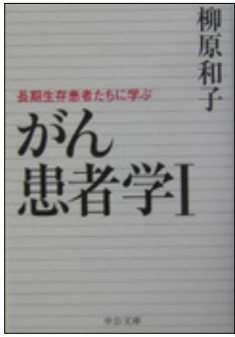
『手紙』 東野圭吾著 文芸春秋

大学に行きたいが、金がない。その弟のために、とある家に入り盗みをしようとしたところ、殺人を犯してしまう兄。加害者の家族の悲惨さ、無残、悲劇的な事々。反面、兄弟愛や絆を考えさせられる作品。弟を主人公とし、感動的な作品となっています。



鈴木 信一

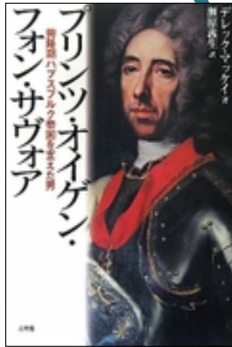
「がん患者学 I・II・III」 柳原和子著 中央公論社



生あるものは必ず滅す。日常生活の流れに埋没しがちな我々はこのことを頭で理解できても自分のことと捉えることはない。死に直面した作家の人間としての弱さを含めしたたかに病気と対峙する中で“死ぬこととは？”“生きることとは？”を模索する真摯な姿勢が記されている。自分に真正面から向き合い、自分を見つめなおすきっかけになる一冊だと思います。

後藤 朋幸

「プリンツ・オイゲン・フォン・サヴォア
～興隆期ハプスブルク帝国を支えた男」
デレック・マッケイ著 文理閣

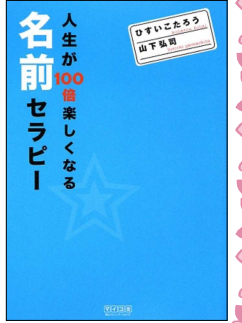


18世紀前半のヨーロッパを代表する名将で、元々はフランス出身でしたが、敵国のオーストリアに仕えてから才能が開花した人です。日本だと、織田信長、豊臣秀吉等と同じくらい知名度、尊敬されています。戦争も強く、芸術も愛したオイゲン公。まさに本校の『文武両道』のお手本となる人物だと思うので、読んでみて下さい。

御代 昌代

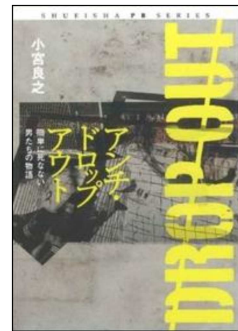
「人生が100倍楽しくなる名前セラピー」
ひすいこうたろう、山下 弘司著
毎日コミュニケーションズ

あなたは自分の“名前”は好きですか？「幸せになって欲しい」その親の祈り、それが“名前”です。あなたが生まれてくることを待ち望んでいた両親が、あなたへあげた最初のプレゼント。自分の“名前”が今よりもっと好きになれるよ。“名前”に秘められたメッセージを覗いてみては？



大塚 義典

「アンチ・ドロップアウト」
小宮良之著 集英社



今、人気のサッカー界の輝かしい背景の裏にある「戦力外通告」や挫折をインタビュー形式で書かれた一冊です。個人的にはアルビレックス新潟の小澤選手の話で、鹿島で10年以上2番手GKとして戦い続けた「心」や、味方に対しての気遣いやサッカーに対する向き合い方がとても素晴らしいと感じました。是非読んでほしい1冊です。

金澤 正和

「硝子戸の中(うち)」 夏目漱石著 新潮社



「硝子戸の中(うち)から外を見渡すと・・・」で始まる。漱石は『道草』と同年に自伝的作品として発表した。翌大正5年に没している。「私の両親は私が生れ落ちると間もなく、私を里に遣ってしまった。」(29節)という述懐とともに薄幸な幼少期を告白する。金之助少年はある晩下女から本当の親が誰かと告げられるのである。

篠崎 歩美

「百年法(上・下)」 山田 宗樹著 角川書店

自分の寿命期限が法により定められているとしたら…？“不老技術の導入で永遠の若さを得た日本国民。しかし、世代交代を促すため、不老処置を受けた者は百年後には死ななければならない。そして、西暦2048年。百年目の「期限」が迫る。”SF小説ですが、法の施行をめぐる社会の動きは現代日本のよう。引き込まれます。



池田 由里子

「のぼうの城」 和田竜著 新潮社

戦国時代、天下統一を目指す秀吉の軍勢が狙う城がひとつあった。武州・忍城。城主の成田長親は、領民から「のぼう様」と呼ばれ慕われるが、智も仁も勇もないまさしく「でくのぼう」。果たして城を守りきる事ができるのか？この図書館だよりが出る頃、ちょうど映画も封切られています。映像で観るより文字で想像する方がいかに楽しいか、目の当たりにすることでしょう。映像ではくすんでしまう鎧や甲冑、雄々しい武者たちが、文字で読めばキラキラ、ドキドキ、ワクワクです。やっぱり本で読むのが一番ですよ！！



西山 光江

「ツナグ」
辻村深月著 新潮社

一生に一度だけ、死者との再会をかなえてくれる死者(ツナグ)。死者にとっても一回きり。突然死したアイドルとOL、母親に癌告知できなかつた息子、親友への嫉妬心に苦しむ女子高生、行方を絶った婚約者と会社員。再会は前向きな



生き方ばかりをもたらさない。私なら誰に会いたいか。残念な事に、彼らの様に強く望む相手がない。



読書週間
企画第2号は、
第1学年の
先生方の
お薦め本です！
お楽しみに！